

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：14701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370567

研究課題名(和文) 英語の完了相と時の副詞句の情報構造に関する研究

研究課題名(英文) A study on Information Structure of the English perfect and temporal adverbials

研究代表者

西山 淳子(Nishiyama, Atsuko)

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：90469130

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：英語の現在完了形には多様な用法があり、時の副詞句for句とsince句の出現の有無や文中の位置と完了形の用法解釈の間の相関関係は、完了形の構造的・意味的多義性の根拠とされてきた。本研究では、現代英語のコーパスでその相関関係を検証し、構造的・意味的多義性に依拠することなく、新たに情報構造から捉え直し分析した。文頭に現れる時の副詞句を領域設定子と捉え、その領域設定子の持つ対照主題性から、解釈傾向が説明可能であることを示した。

研究成果の概要(英文)：The English perfect can have multiple interpretations. Previous studies have regarded the co-occurrence of those interpretations with temporal adverbials such as for-adverbials and since-adverbials and the correlation between the interpretations and the sentential positions of those adverbials as evidence for the ambiguity of the perfect. This study looks at naturally occurring language data and shows that the correlation between the interpretations of the English present perfect and those temporal adverbial phrases are merely pragmatic tendencies. It also shows that the tendencies can be explained based on the information structure. That is, the temporal adverbials in sentence-initial position are regarded as frame setting topics, which also function as contrastive topics. This contrastive topicality causes strong pragmatic tendencies in the interpretations of the present perfect.

研究分野：言語学

キーワード：現在完了形 時の副詞句 継続用法 非継続用法 情報構造 対照主題 英語

1. 研究開始当初の背景

英語の現在完了形は、結果、継続、経験、完了用法など多様な解釈を持ち、その意味分析には、主に二つのアプローチがある。一つは、現在完了形で表された出来事や状態事象は、「拡張現在」(Extended Now interval, または Perfect Time Span) に起こるとする Extended Now 理論(XN 理論)で(McCoard 1978, Dowty 1979, Portner 2003, 他) もう一つは、完了形を状態化子とみなす結果状態(Result State)アプローチ(Kamp and Reyle 1993, de Swart 1998)を発展させた完了状態(Perfect State)アプローチ(Nishiyama and Koenig 2004, 2010; Nishiyama 2006, Schaden 2009)で、その完了状態の解釈によって、多様な解釈が現れると考える。前者は完了形には多義性があるとみなし、多義性に基づいて多様な解釈を説明し、後者は完了形の様々な解釈は語用論に基づいて導かれるとしていた。

これら二つのアプローチの争点となる現象は、継続の時の副詞句の位置による現在完了形の解釈の違いである。英語の状態文が現在完了形で現れるとき、継続用法と非継続用法の二通りの解釈を持つ。従来、この二通りの解釈と時の副詞句の共起の有無や文中の出現位置との間に相関関係があるとされ、その関係が完了形の多義性の根拠とされてきた(Dowty 1979, Portner 2003, 他)。

例文(1)a は継続の時の副詞句 for-句、又は since-句が文末に現れ、継続用法と非継続用法のふた通りの解釈があり、(1)b では時の副詞句を共起しないため、非継続用法の解釈のみが得られ、(1)c では for-句、または since-句が文頭に現れているため、継続用法の解釈のみが得られるとされた。

- (1) a. Ken has lived in London for five years/ since 2001.
 b. Ken has lived in London.
 c. For five years/Since 2001, Ken has lived in London.

他方、Nishiyama & Koenig (2010)を含む完了状態アプローチの立場は、それらの相関関係は語用論的な傾向にすぎないとし、会話の参加者が、一つの完了形の意味から語用論的推論によって、異なる解釈が導き出す仕組みを解明してきた(Nishiyama and Koenig 2004, 2010; Nishiyama 2006; Schaden 2009)。

しかし、両者のアプローチに共通する問題は、二つの用法を区別する証拠とされる継続の時の副詞句と現在完了形文の用法解釈との間の相関関係の有無について、自然言語のデータによる妥当な検証がこれまで行われていなかったことである。科学としての言語

学がデータの適切な検証なしに、議論を進めることには限界があり、このことが両者の理論の発展を阻む大きな要因となっていた。

Nishiyama (2006) や Nishiyama & Koenig (2004, 2010) は、現在完了形の結果、継続、経験用法などの多様な解釈は、一つの完了形の意味から、新グライス主義に基づく語用論的推論によって生じていることを明らかにし、コーパスで自然言語データを分析し、英語の完了形の多様な解釈を得る際に、実際に会話の参加者が使用する推論を明らかにし、その推論過程と推論規則を記述した。そして談話分析により、完了形の談話機能を明らかにした。これらの研究は、完了形の意味を談話の文脈に結びつけて分析した数少ない研究とされている(Ritz 2012, de Swart 2016)。しかし、上述のように、現在完了形の解釈と時の副詞句との共起・位置関係に関する自然言語データの検証が欠けていることが指摘されていた(Portner 2011)。

2. 研究の目的

本研究の目的は次の二つである。上述のデータの信頼性の問題を解決するため、自然言語データにより多義性の根拠とされている継続の時の副詞句と状態記述の現在完了形の解釈との相関関係を検証し、それらの相関関係は語用論的な傾向にすぎないことを示す。その相関関係を語用論、とりわけ情報構造から分析する。

上記については、自然言語データ検証で、意味論的な厳密な相関関係が得られない場合であっても、継続の時の副詞句の位置と現在完了形の解釈の間に、強い相関関係があることは明らかである。完了状態アプローチでは、これまで完了状態の解釈は、新グライス主義の語用論的推論で導かれるとしてきた。しかし、副詞句の文中に現れる位置による完了状態の解釈の違いの傾向を新グライス主義的推論で捉えることはできない。そのため、それらの相関関係を情報構造の点から分析する。

3. 研究の方法

(1) 現代英語の自然言語データを集めたコーパス Corpus of Contemporary American English (COCA)を利用し、自然言語データから主動詞と項による記述事象が状態である現在完了形文の用例を次の条件で分類して取り出し、それぞれの用例の解釈が継続用法か非継続用法であるか調査した。

- 時の副詞句・節と共起しない現在完了
 for + 時間の副詞句が完了形文の文頭に起こる用例
 since + 時の副詞句が完了形文に文頭に起こる用例

以上の用例と完了形の継続・非継続用法の区別との間の相関関係の有無を調査した。

(2) 継続の計量副詞句 (for 句と since 句) と完了形に加えて、一般的に時の副詞句の出現位置が、文の解釈に及ぼす情報構造上の影響を調べるため、現在の時の副詞句 now を取り上げ、文頭に置かれた時の解釈の影響を調査した。そして、情報構造に基づいて、その解釈の違いを分析した。

(3) 最後に、文頭に置かれる時の副詞句が情報構造的に文の解釈に与える影響を、継続の計量副詞句が状態の現在完了形の文の文頭に現れた時の解釈傾向に応用し、完了状態アプローチによる意味分析を前提に、情報構造に基づいて分析した。

4. 研究成果

(1) 現代アメリカ英語コーパス Corpus of Contemporary American English (COCA) を利用し、時の副詞句と共に起らない状態の現在完了形文を調査した結果、多数の継続用法の用例が見られた。Portner (2003) では、for+時間句を欠く状態の現在完了形は、状態が継続している状況でも使用可能だが、状態が終了しているという解釈がデフォルトの含意となり、その含意は取消可能であるとしている。つまり、for+時間句のない現在完了形文で、状態継続の解釈を得るためには、その文構造から生ずる状態の非継続というデフォルト含意が取り消されることが必要となる。しかし、データでは、含意の取り消しもなく、継続用法で解釈可能な用例が多数見られた。

時の副詞句の for+時間句と since 句が文頭に現れる現在完了形文の解釈について COCA を利用した調査を行った。

まず for+時間句については、完了形文の継続用法と非継続用法の間の構造的な多義性の根拠とされてきたデータ記述と、実際の自然言語データの観察事実は、厳密には一致しないことが分かった。つまり、for+時間句の位置と現在完了形文の解釈の間の相関関係は、継続用法と非継続用法を区別するものではないことが明らかになった。

Portner (2003, 2011) を始め、XN 理論では、完了形の継続用法では、発話時間に記述事象の状態が継続していなければならないとされる。しかし、for+時間が文頭に現れ、且つ、広義の意味で継続用法と呼ばれる用例の中には、実際には発話時の少し前に状態の継続が終了しており、厳密な意味では非継続用法と捉えられる用例が多数見られた。この結果は Michaelis (1998) による現在完了の継続用法の観察とも一致する。

さらに、文頭の for+時間句に修飾される状

態事象が、発話時の直前ではなく、完全に発話時とは離れた過去に起こる非継続用法の解釈を持つ用例も見られた。ただし、文頭の for+時間句と非継続用法の共起には、完了形の状態の for 句で表される継続時間の時間位置について、聞き手と話し手の間の特定可能性 (identifiability) が関わっているという観察結果が得られた。対照主題としての for+時間句には、精通性 (familiarity) の特性があり (Roberts 2011)、非継続用法であったとしても、for+時間で表される状態の継続時間は、話し手と聞き手の間で特定可能 (identifiable) な時間位置になければならないということが分かった。

時の since 句で始まる継続事象をとる現在完了形文の用例については、非継続用法とみなされる用例はあったものの、経験を表す典型的な存在用法は見つけることができず、大部分が継続用法か広義の継続用法の解釈を持つ用例であった。

(2) 完了形文や継続期間を表す時の副詞句以外に、文頭に置かれる現在の時の副詞 now は、情報構造上、領域設定子 (frame setter) (Jacobs 2001, Hinterwimmer 2011) と捉えられ、その対照主題性 (contrastive topicality) (Krifka 2008) から、通常の直示的機能だけではなく、物語過去の文脈で物語時間を進め、談話の中で話題を変える談話機能を持つなど、文末に現れる場合とは異なる解釈が得られることが分かった。

(3) 状態の完了形の文頭に現れる for 句と since 句についても、対照主題の一種である領域設定子と捉えることで、継続用法の解釈との強い相関関係が説明可能であることが分かった。

領域設定子については、その対照主題性により、潜在的な代替主題の存在を想起させ、そして、代替主題ではなく、文に現れた対照主題に設定された領域で命題が真とならなければならないということが情報構造的に示唆される。

時の副詞句は、完了形の入力となる事象と出力となる完了状態のどちらも修飾することが可能であるが、なかでも for 句と since 句は [+hom] (homogeneity 均一性) という特性を持つ事象、つまり状態事象 (state) や限界性を持たない出来事事象 (atelic event) を修飾する (Kamp et al 2015)。

完了形の出力である完了状態が入力の状態事象ではなく、その結果状態である非継続用法や存在用法の解釈の場合、for+時間句は完了形の入力の状態事象の継続時間を表す。過去から発話時まで、for+時間句で表される継続時間を持つ状態が少なくとも 1 回生起

すればよく、何度、出現しても、異なる継続時間の出現があっても構わない。しかし、厳密な意味での存在用法の解釈では、コーパスで観察された時間位置の特定可能性、つまり、主題性に要する精通性を満たすことができず、潜在的な代替主題領域(例えば、例文(1)cの For five years に対して、{For one year, For seven years, For a month,...})を想起するには特殊な文脈が必要となり、対照主題性を有することが難しい。ゆえに、文頭に領域設定子として for+時間が現れる時、その対照主題性のために、特定可能な代替主題の存在を示唆するため、継続用法の解釈が優勢となるということが分かった。

同様に、状態事象の起点を表す since 句についても、非継続用法の解釈では since で表される期間にその記述事象が一度でも起こればよいので、代替対照主題の存在を示唆することが困難となる。継続用法の *Since 1984 Ken has lived in London.* という文の since 1984 という領域設定子の代替対照主題の領域、例えば、{Since 1900, Since 1980, Since 1982, ...} が、存在用法の解釈では、いずれも真となり、対照主題性を有することが難しく、継続用法の解釈となることが分かった。

現在完了形と時の副詞との関係については、近年 Kamp et al.(2015)が統語論と意味論の相互関係から分析し、情報構造が関わっていることを示唆しながらも、未だその分析は行われていない。本研究は、自然言語データに基づき従来の観察と分析を検証し、情報構造の概念に基づく現在完了形と時の副詞の相互関係に関する新しい観察と分析を示した。

【引用文献】

- Dowty, D. R. (1979). *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Reidel.
- Hinterwimmer, S. (2011). Information structure and truth conditional semantics. *Semantics, Volume 2*. Eds. K. Heusinger, et al. Walter de Gruyter. 1875-1907.
- Jacobs, J. (2001). The dimensions of topic-comment. *Linguistics*, 39(4), 641-681.
- Kamp, H., et al. (2015). *Perfects as Feature Shifting Operator*. Ms.
- Krifka, M. (2008). Basic notions of information structure. *Acta Linguistica Hungarica* 55. 3-4: 243-276.
- Nishiyama, A. (2006). *The Semantics and Pragmatics of the Perfect in English and Japanese*. State University of New York at Buffalo. Ph. D dissertation.
- Nishiyama, A. & J.-P. Koenig. (2004). What is a perfect state? *WCCFL* 23. 595-606.

- Nishiyama, A. & J.-P. Koenig. (2010). What is a perfect state? *Language* 86, 3. 611-646.
- Portner, P. 2003. The (Temporal) Semantics and (Modal) Pragmatics of the Perfect. *Linguistics and Philosophy* 26, 459-510.
- Portner, P. (2011). Perfect and Progressive. *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Vol.2*. Berlin: de Gruyter. 1217-1261.
- Ritz, M.-E. (2012). Perfect Tense and Aspect. *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*. Oxford: Oxford University Press. 881-907.
- Roberts, C. (2011). Topics. *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Vol.2*. 1908-1934.
- Schaden, G. (2009). Present perfects compete. *Linguistics and Philosophy* 32. 115-141.
- de Swart, H. (2016). Perfect usage across languages. *Questions and Answers in Linguistics, Vol 3. Issue 2*. 57-62.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

西山淳子 「英語の現在の時の副詞 now の意味と様々な用法」和歌山大学教育学部紀要－人文科学 67巻 2017年 頁107-112

〔学会発表〕(計2件)

西山淳子 『情報構造と完了形解釈(仮)』日本英文学会関西支部第13回大会 2018年

西山淳子 『英語の談話における副詞句の解釈：nowと参照時間』言語学シンポジウム「日常言語の今：語用論的観点からの日英語の分析」立命館大学 2016年

〔図書〕(計1件)

赤楚治之、高坂京子、山内信幸、北林利治、藤岡克典、長谷部陽一郎、西山淳子、他 『ことばとの対話－記述・理論・言語教育(仮)』英宝社 2018年

〔その他〕

ホームページ等

和歌山大学学術レポジトリ 和歌山大学教育学部紀要. 人文科学

<http://repository.center.wakayamau.ac.jp/list/f/%E5%92%8C%E6%AD%8C%E5%B1%B1%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E6%95%9>

9%E8%82%B2%E5%AD%A6%E9%83%A8
%E7%B4%80%E8%A6%81.%20%E4%BA%
BA%E6%96%87%E7%A7%91%E5%AD%A
6/67

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西山 淳子 (NISHIYAMA, Atsuko)

和歌山大学・教育学部 准教授

研究者番号 : 90469130